巻　頭　言

保健管理センター長　小泉　順二

今年度よりセンター長として働くことになり、新型インフルエンザの流行もあり、あわただしく月日が過ぎている。保健管理センターの具体的な業務について、また、学内の保健管理センターの位置づけについて学ぶところの多い日々である。ここでは、日ごろ感じていることを記し、巻頭言の責めを果たしたいと思う。私は、以前は糖尿病・高脂血症（今では脂質異常症と呼ぶようになっているが）の分野でリポ蛋白代謝の研究を行っていたが、1998年以後は医師・患者関係、evidence-based medicine、臨床疫学、地域医療、患者中心医療、全人的医療などをキーワードとする総合診療に関する診療、教育、研究に携わるようになった。総合診療を意識するようになり、臓器・系統的専門性（縦断的）と、活動を行う場を基に考える横断的な専門性との違いを常に意識するようになっている。総合診療は、家庭、地域、社会といった場での医療、診療をどのようにするかが根本であり、保健管理も学生、職員、大学といった場での仕事である。総合診療でも家庭、地域での障害、疾病予防は重要なテーマであり、大学の保健管理においても同じと認識している。

場を基にした健康管理ではいろいろな専門を持つ職能者との連携、いわゆるチームでの取り組みが欠かせないことはいうまでもない。感染予防では感染症の専門家、予防医学の専門家、患者ケアの専門家、安全管理の専門家、易感染性には栄養もメンタル面もからみ、関係する専門を羅列すればきりがないほどである。行うべき事柄をシステムとして機能的に動かすための事務職も当然のことながら重要である。保険管理の職能集団とすればどのようにしなければならないかであるが、それぞれの専門（得意分野）はあるにしろ、今直面している健康管理における問題に対してどのような行動が必要かを集団として判断することが求められる。そのためには、各専門家が自分の専門領域を超えての連携が望まれるところであり、より密な情報の流れと共有が必要と考えられる。おたがいの職種、能力を認め、おたがいの信頼関係が重要であり、いわゆる顔の見える関係が望まれるところである。

この顔の見える関係というのが最も難しいところと感じている。それぞれの専門をもっている職能者はそれぞれが活動範囲をもっており、所属集団全体の活動範囲と必ずしも一致せず、多くは活動範囲の一部が所属集団の活動範囲と一致していると思われる。このような状況から、おたがいの職能、活動内容をすべて把握することは困難である。多少の論理に矛盾はあるが、見える範囲の行動から、それぞれの活動を評価することを行わなければならない。ヒトは感情の動物ともいわれる。言葉、文字でも感情は動くが直接対面する、顔を見ることによりさらなる感情が動く。理知的な論旨のみを伝えるときは言語、とくに文字で伝えるのが余分な感情がはいりにくいことからよいのかもしれない。しかし、この巻頭言においても私はできるだけ論理的に考えて私の論旨を文字で伝えようとしているが、このような漠然とした文は受け取り手にどのように伝わるのか不明であり、不安なところでもある。

これまでの職能者は自分の専門性を高めるために努力し、常に最高のspecialistであろうと努めていたように思う。しかし、横断的な職能集団ではprofessionalとしての能力が求められると考える。各研究域の研究者（教員）は、その分野のspecialistであるために科学の真理を追究している。しかし、保健管理センター職員の能力はそれぞれの職域でのspecialistとしての努力と同時に、professionalとしての能力の獲得が必要と思われる。保健管理センターの仕事においては、いわゆる科学的真理、正解はなく、医療と同じく不

確実性のなかでの仕事と理解している。可能な限り的確な判断を行う、状況により変わりうる対応が求められるところと思っている。

さて、このようなspecialistとしての職能者を重視することは必要であるが、あまりにすべて職能者だけに任せてしまう風潮が増長しているように思われる。日本人が後悔をできるだけ少なくなるような判断をする傾向のためかどうかわからないが、専門家(specialist)にたよる風潮があらゆるところに存在している。地域医療においても各種の専門家が必要であるとの考えから医師数を増やし、結果的には医師の不足、また、地域では専門家が満足するだけの患者数と設備を整えることができずに、医師の都市部偏在が問題となっている。大学という社会においてもこのような懸念はないであろうか。各自の判断能力の低下は集団としての判断システムの障害につながり、判断手続きの複雑化をもたらしているように思われる。学生、教職員各自の健康管理、健康問題解決力の向上が保健管理の最終到達目標と思っている。

この年報・紀要は本センターの活動記録でもある。本年報・紀要をご高覧いただき、本センターへのご提言、ご教示等いただければありがたいと思います。本誌を借りてこれまでのご厚情、ご協力に感謝するとともに、これからも本センターへの温かいご支援、ご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

2009年11月